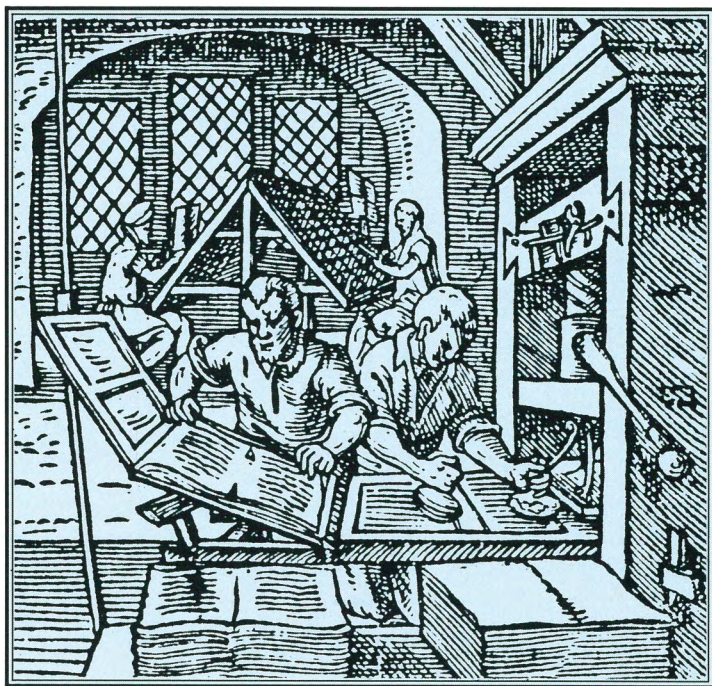


# 大学出版

'94 夏

No. 22



大学と社会を結ぶ  
知のネットワーク

The Association of  
Japanese University Presses

大学出版部協会



大学出版  
22号

Summer · 1994

読書の周辺	本の周辺	利光 功	1
読書の周辺	楽園随想	松村 賢一	5
ヨーロッパの大学出版事情		山下 正之 成田 和男 山本 俊明	9
大学出版部ニュース			14
新刊案内'94・4と'94・6			20
製作の現場から			表 3

表紙イラスト ヨースト・アマン 『職人図鑑』より  
大学出版部協会マーク・デザイン 道吉 剛

## 本の周辺

## 利光 功

(玉川大学文学部教授)

はじめに

最初から私事で恐縮だが、最近、私はいわゆる読書なるものを全くと行ってよいほどしていない。けれども本を開かない日はない。主として横文字の本だが講義のねたを仕入れるために、あれこれの本を開いてところどころ走り読みする。こういうのは拾い読みと言って読書とは言わない。また机上には翻訳中のドイツ語の本が開きっぱなしになっている。この本の場合には最初のページから最後まで精読することになる訳だが、翻訳のために読むことは、普通、読書とは言わない。勿論、日本語の本も開く。先日は国学院大学の谷川渥氏から『鏡と皮膚』（ポーラ文化研究所刊）が送られてきた。すぐさまパラパラと開き例によっておいしそうなところだけを拾い読みした。私は勝手にこれをつまみ食いならぬつまみ読みと称している。さらに民

族藝術学会に入っているために、今しがた『民族藝術』第十号（講談社発行）が送られてきた。なかなか面白いレポートがあり、これもつまみ読みした。しかし学会誌であつても、このような雑誌を読むことは、新聞や漫画本を読むことを読書と言わないのと同様に、読書とは言わない。

という訳で、読書をしていないのであるから、この原稿執筆を一旦は断わつたのである。しかし玉川大学出版部の関野利之氏は、読書そのものではなくて「周辺」なのですと理屈をつけて許してくれない。苦しまぎれに「本の周辺」と題して以下につまらぬ私事を書き連ねるゆえんであり、読者諸賢にはつまみ読みされるよう願っておきたい。

## 積まれる本

読書をしなのに、本は買っている。かつて一時LPレコードを買い集めた時期があつた。最初は勿論、買ってきただレコードは全部聞いた。時には繰り返し聞いた。そのうち一部しか聞かないレコードが出てき、ついには買ったものの全然聞かないレコードが出るに及んで、買うのを止めた。VTRを購入したのは確か昭和五十年で、まだモードIしかない機器であつた。当時はテープの価格も相当高かつたから、一本のテープで録画・再生を繰り返した。そのうち急にテープが安くなり、まとめ買ひして放映される名作映画などを次々と録画した。しかしある時ふと録画した映画などを全く見ていないことに気がつき、以後、テープ

を買うことも録画することも止めた。

ところが本だけは読まないと分っていないながら、どういう訳か、相変らず買い続けている。その結果は言わずと知れた積ん読であり、実際に書架はとうの昔に一杯だから床に積んで置いてある。「本は積んでおくもの」と悟ったというか居直ったのは近年のことで、以前はそうではなかった筈だと思ひ、今改めて振り返ってみると、わが積ん読の始まりは自分の小遣いで本を買いだした最初の時にあることが判明した。すなわち昭和二十七年十一月にロマン・ローランの『ジャン・クリストフ』(1)とアルベール・カミュの『異邦人・ペスト』で始まった新潮社版『現代世界文學全集』と、昭和二十八年八月から『島崎藤村集』で始まった筑摩書房版『現代日本文學全集』を取りだしたが、最初のうちこそ夢中で読んだ覚えがあるものの、何しろ両全集とも毎月一冊配本されてくるものだから、到底読み切れなくてすぐさま積ん読になったのである。

このような文學全集や続き物は単行本と違ってどうも積ん読になる傾向が強い。随分前に岩波書店から刊行された『奈良六大寺大観』(全十四巻)や『大和古寺大観』(全七巻)などは写真図版が大半を占めるのにもかかわらざらくろく見ていない。Propyläen Kunstgeschichte(全二十五巻)のような美術全集にしても同様である。そこで最近では全集の類を買うのは控えている。目下取っている全集は『下村寅太郎著作集』(みすず書房)、『アウグスティヌス著

作集』(教文館)、旧東ドイツの古都ヴァイマールの Hermann Böhlau Nachfolger という書肆から刊行されている『国民版』シラー全集』ぐらいで、いずれも相当前に始まり不定期に刊行を続けているものである。なかでもこのシラー全集は第二次世界大戦中の一九四三年に刊行が始まって半世紀を経た今日いまだ完結していない代物で、東西統一後刊行のピッチが上がっているものの、いつ終るのか見当がつかない。

#### 増える本

シラー全集は全四十三巻の計画なのだが、これは全四十三巻を意味しない。最近着をみると第二巻、II B となっていて、第二巻だけでも I、II A、II B の都合三冊から構成されており、どんどん増え続けているから、最終的に何冊になるのか不明である。このように全集物はまた勝手に増える傾向がある。先の『現代世界文學全集』や『現代日本文學全集』にしても途中で第二期という計画が加わり、最後は最初に予定した倍近い冊数になった。『アウグスティヌス著作集』も最初の十五巻に第二期十五巻が加わっている。これ自体は決して悪いことではないが、積ん読本が無闇に増えるのはスペースの関係で困るので、これも最近全集物を買う控えている理由である。

購入する単行本も近年分量というか冊数が増える傾向にあるが、これは本の値段が相対的に安くなっているからである。私の学生時代、すなわち昭和二十年代の終りから昭

和三十年代の前半にかけては、例えば十ドルの洋書は四千元した。一方アルバイトは日給五百円程度であったから、十ドルの本を買うのに八日間の労働を要した。週二日の家庭教師のペイが月三千円程度であったから、一月分をもってしても買えなかった訳である。従って洋書を買うのは大変で、なかなか増えなかった。今日、昔十ドルの洋書が三倍値上がりして三十ドルになったとしよう。これは昔のレートでは一万二千円ということになるが、円高ドル安のお陰で現在四千元で買える。つまり全然値上がりしていないことになる。他方アルバイト料は十倍にはなっているから、昔一冊しか買えなかった労働量で十冊買える計算になる。一部の特殊な古書を除けば、洋書は格段に買い易くなり、冊数の増大する道理である。

買う本以外に、著者や訳者から頂戴する本も結構多い。先上げた谷川渥氏の著作のほか、最近頂いた本を一寸と列挙してみよう。訳者の篠原資明氏からウンベルト・エーコ『物語における読者』（青土社）、武藤三千夫東京芸術大学教授から大橋良介編『文化の翻訳可能性』（人文書院）、訳者の神林恒道大阪大学教授からヴェルナー・ブッシュ『ライト（空気ポンプの実験）』（三元社）、訳者の一人、岩城見一京都大学助教授からW・イェッシュケ／H・ホルツァイ編『初期観念論と初期ロマン主義』（昭和堂）、訳者の清水芳子松蔭女子学院大学教授からJ・ラドリン『評伝ジャック・コポー』（未来社）、執筆者の一人、前田富士男

慶應義塾大学教授から名画への旅20世紀Ⅱ『モダン・アー  
トの冒険』（講談社）などである。かなり前に発行された本  
であるが、来日されたベッツォルト教授（マーストリヒト・  
ヤン・ファン・アイク大学）から Heinz Paetzold: *Profile  
der Ästhetik* (Passagen Verlag) 訳者の五十嵐ミドリ氏か  
らピエール・バレ、ジャン・ノエル・ギュルガン『巡礼の道  
星の道』（平凡社）なども最近頂いた。

さらに先日はドイツの学術図書クラブ (Wissenschaft-  
liche Buchgesellschaft) から三冊単行本が届いた。会員に  
特別価格で配布されるもので、年三冊とはいえ二十年近く  
前から会員なものだから、このシリーズだけでももう五十冊  
以上になっている。会員といえは、学会から送られてくる  
学会誌も自然に増える。大概の学会誌は季刊あるいは年刊  
だが、数年前に入会した建築学会は月刊誌を刊行していて  
溜り方が早い。また私は美術展覧会などを観に行くと図録  
を買ってくる習慣があり、これもじわじわ増え続ける。図  
録は本ではないかも知れないが、書架を相当量占領してい  
ることは事実である。

こうして増え続ける本により天井まで八段四連の書架五  
面からなるわが書庫はとうの昔に満杯になり、書齋やあま  
り使わない応接室の床に積み上げるのも限界に達し、カル  
チャー・ジャパンなる会社にダンボール箱で四十箱ほど預  
けるに至っている。

別に自慢する訳ではないが、量のみはこのように結構あ

るけれども、もともとポケットマネーで買える範囲の本しか買っていないから、高価な本などは一冊もない。ただ昭和四十一年に東大の助手を辞めた時に支給された退職金十数万円を *Encyclopedia of World Art, McGraw-Hill* (全十六巻) を記念に買ったのが、私にしてみれば大金を投じた唯一の場合である。専門の美学の研究を進める上で必要だから、あるいは必要になるのではないかと四十年間買い続けてきた結果、家に収まりきれなくなつたと言うに過ぎない。ただ流石に最近では読まないと分っている本を買い保管料を払って倉庫に預けるという、われながらおかしい行為に疑問を覚え始めているが……。

#### 本の整理

購入した本は、その順序に積み上げてあつて整理はほとんどしない。

自分の本は整理しないけれども、過去に二度ほど他人の蔵書の整理めいたことはしたことがある。そのひとつは大西克禮先生の蔵書である。大西克禮先生は東京大学文学部の美学講座を昭和四年から二十四年まで担当された大先生であるが、昭和三十四年に福岡市で逝去された。第二次世界大戦で大部御自宅の蔵書を焼かれたとお聞きしたが、退官時に教官室に相当の量の蔵書を置いていかれた。亡くなられた後、それを一括して美学研究室に収められることになり、丁度助手をしていた私が図書館に登録にし、「大西記念文庫」のラベルを貼り、美学研究室独自の分類をし

て図書番号を付け、書架に収めるといふ作業をしたのである。この蔵書はすべて戦前に発行された洋書で、ドイツ語の哲学・美学関係の専門書が主体をなしていたが、分類整理の必要上、一冊一冊手に取つてつまみ読みした。つまり大学者の蔵書をつぶさに調べた訳で、今思えばこれが私の本を買い集める動因と手本になつたようである。

もう一度は大西克禮先生の後任の私の恩師竹内敏雄先生の蔵書の整理である。竹内先生は昭和四十一年に東大を定年退官され、昭和五十七年に亡くなられた。その後しばらくして大磯のお宅にしばしばお伺いし、お嬢様の彩子さんに協力頂き全蔵書のカードを作製した。そしてそれをもとに蔵書リストを作つたのである。竹内先生の場合は哲学・美学のほか文芸学関係の専門書が多く、戦後購入されたものも相当含まれていたけれども、兩次大戦間にドイツで刊行された専門書が主体をなしていた。両先生とも本の冊数は千冊とはなかつたが、購入のためには多額の費用を要したのであろうと推察された。

さて私の蔵書は分量の上では両先生のそれよりもかなり多い。しかも整理をしていないから、必要な本を捜す段になると時に手間取ることがある。しかしなまじ整理をするとかえつて混乱を招く恐れがあるし、第一、書架に余裕がなければ出来ない相談である。購入順に積んで置くのは、整理とは言い難いけれども、私なりの「超」整理法だとしておこう。

## 楽園随想

松村 賢一

(中央大学教授)

時間空間を超えたはるか彼方の場所の夢想はさまざまな形をとって現われる。それは民俗的な楽園幻想であり、あるいは異界幻想で、これまで多くの民話や文学を生んできた。その夢想を宇宙論的なイメージまで拡大して、生の深淵を開示しようとするものもあれば、内奥の深みへと下降し、はるか深所にあるものを覚醒しようとするものもある。この遠方の地はしばしば聖なる地となり、人びとが過去の記憶の湧き出る場所、つまり根源への回帰を希求するモメントになったと考えられる。このような心願の郷について思いつくまゝに少し綴ってみよう。

そこでまず想い浮かぶのが、イギリス・ロマン派の詩人、S・T・コールリッジの「クープラ・カーン」に現われる幻視の都、ザナデューである。この音楽性にあふれた詩において、ミルトンの荘重な『失楽園』の向こうをはって出

てきたかと想わせるような楽園の風景が展開する。

ザナデュー(上都)はクープラ・カーン(クビライ・カーン、忽必烈汗)が元朝の初祖として帝位についたときに築城した、壮麗な都として知られている。作者は阿片服用後の半覚醒状態で現われた砂漠の真中にある魔法の場所、泉が湧いて木々が茂り、緑なす幻想的な場所でのこの詩を書いたという。意識や感覚から一切解放たれて体験した幻をそのまま覚醒後に書き綴ったものであるが、その幻想は『パーチェスの回航記』に触発されたものであったらしい。「ザムデューでクブライ・カーンは、周囲十六マイルの平原に塀をめぐらし、その中に荘厳な王宮を建立した。そこには豊饒な草原や泉や河があり、その他あらゆる種類の狩猟に供する鳥獣が住み、中央には壮麗な歓楽の宮がある。」(パーチェス)とはいっても、この詩には他のさまざまな風景が渾然としているわけで、植物や動物の珍種を探しに歩いたアメリカの植物学者の旅行記とか、スコットランド人の探検家の書いたナイル河の水源探検記、またミルトンの叙事詩『失楽園』などから得た記憶がこの詩に溶け込んでいる。幻想ではこうした詩人の内に蓄積された過去の記憶が放流されるのである。

波の逆巻きが絶え間なく聞こえる峡谷から、あたかも大地があえぎ息づくように、大いなる噴泉が刻一刻に湧き出る。巨大な岩片が、麦打つ人の殻竿にとびかう靱がらのようにとびはねる。このおどる岩のはざまから、太古の聖な

る河アルフは刻々に噴出し、森を抜け、谷を渡り、五マイルをくねくね曲り、流れ流れて底も知れぬ洞穴に達し、死のわだつみへどよめきわたり、沈み去る。そして幻想が美しい音楽に溶け込み、静寂が深淵にいきわたる。波上に歓楽の宮の影が浮かぶと、泉と洞穴から美しい旋律が聞こえてくる。アビシニアの乙女が小琴の調べに合せて、数々の美しい庭園に囲まれたアポーラ山の宮殿を歌い、その弦の奏でる夢幻の旋律があたりにやさしく響きわたり、法悦の世界が現われる。

遠方の地ザナデューは日常性を超えた彼岸、時間空間を超えた、ひとりの詩人の幻視の都である。

ここで古代ケルトの世界に目を移してみよう。アイルランドには古くから、『コンラの冒険』や『ブランの航海』、『マールドゥウンの航海』といった、異界への冒険や航海の物語が数多くある。その成立は古く、キリスト教伝来前のアイルランド社会で生まれ、アイルランド修道院文化の時代（六世紀―十二世紀）に書き写されるまで、口承によって伝わっていたと思われる。いずれも妖精の国での一時的な滞在が語られる。異界の音楽、妖精の女王、魔法の枝、異界への旅、この超自然の国の悦楽の描写など、いずれも物語の特徴をなし、アイルランドの世俗的な文学の伝統の中でさまざまな形で現われる。

ここでは七世紀頃に書かれたと推定される『フェヴァルの息子ブランの航海と冒険』をとりあげてみる。この物語

は五六の四行連と一〇箇所挿入された散文で構成される。ある日ブランがひとりて要塞のあたりを歩いていると背後に音楽を聞く。彼はその心地よい調べに眠ってしまう。やがてブランが眠りから覚めると、白い花をたわわにつけた白銀の小枝がかたわらにあった。ブランはその枝を手にし、父親の王宮に持ち帰った。すると各地から訪れた王侯でにぎわう城に、不思議な衣をまとってたたずむ美しい女の姿があった。そのとき女が五〇からなる四行連をブランに歌い、一同はその歌に聞き入った。

わたしはエヴナより人ぞ知る枝、林檎の木の一枝をもってきた。まばゆい白銀の小枝を幾枝にもつけ、水晶の枝先は花々に満ちている。海原はるかに島があり、目にはよるこぼしい、めくるめく世界、これぞあまたの者の遊び興じる地。白銀の南の草原の下に白いブロンズの柱が幾世にもわたって輝いている。幾多の花々が降りそそぐ永遠にうるわしい国。かの地では歎きもなく、不信もない。粗暴、苛酷なこともなく、あるのは耳に心地よい調べのみ。苦悩もなく、悲哀もなく、死もなく、衰弱もない。それがエヴナの証。これほど不思議なものはない。若からは百の旋律があふれ出る、時には銀が降りそそぎ、純白の崖が海の稜線にそびえる。美しい極彩色のかの国では衰弱も死も見ることはない。

女が語り終えると、銀の枝はブランの手から女の手に飛び移り、女の姿が消える。



次の日、ブランは海上へ出た。同行者は九人ずつ三隻の舟に分かれて乗った。二日二晩海を漂うと、海神リルの子マナナンが海上を二輪戦車にのってブランたちに向かってきた。マナナンもまた三〇からなる四行連を歌う。

ブランの乗る船先の突き出た小舟にはなんと清らかな海であろう。二輪戦車にいるわれの目にはそこは花々の咲く喜びの草原。リルの子マナナンの国では川に蜜がほとばしる。広大な草原、色彩は無垢な栄光に輝く。うるわしい白銀の流れ、黄金の布はすべて豊かな饗宴をもたらす。彼らは楽しい競技に打ち興じ、座って美酒を飲み、戯れる。

森の天辺に沿い、屋根を越えながらなんじの舟は進む。船先の下方には美しい果実をつけた森がある。その上に葡萄の木のことの香り漂う。朽ちることなく、傷むことのない、黄金色の葉をつけた木々。マナナンとカンティヒャルの間に生まれた子は青い海でも、陸でも、あらゆる獣の姿になるであろう。攻めくるあまたの前で竜となり、あまねく大森林の狼となるだろう。二輪戦車の駆けめぐる陸地において、彼は銀の角をつけた牡鹿となるだろう。水をたたえた瀕ではまだら模様鮭となり、海豹となり、純白の白鳥となるだろう。「女人の国」までは遠くない。なんじは日の沈むまでに着くだろう。

やがてブランたちは女性しか住んでいない不老不死の海中の楽土に到着し、歓待される。大きな館には各男女のための床があり、皿に盛られた食べ物はいくら食べても無く

ならなかった。彼らにとって、そこにいたのは一年のようであったが、現実には何年も経っていた。そこで楽しい日々を過ごしているうちに、ネフターンが郷愁の思いにとられ、彼の血筋にある者がともにアイルランドに戻るようブランに懇願した。女王は行くと後悔するといいながら、その地に触れてはならないと警告する。一行がアイルランドの岸辺に着くと、ネフターンは舟から跳び降りた。彼はまたたくまに灰と化した。それはあたかもこの地で幾百年が過ぎたかのようであった。

ブランは漂泊の始まりからその時までのことすべてを岸辺に集まった衆人に語り、別れを告げた。その後の彼の漂泊を知る者はいない。

不老不死の異界には時間がない。そのため、旅と帰還にまつわるこの世と異界の時間のずれが明らかにされる。ケルトの物語ではこの時間のずれをモティーフにしたものが多く見られる。異界での三カ月が現実には三〇〇年たち、郷愁の念にかられて異界を離れ、女の忠告にそむいてアイルランドの地に足が触れたとたんに白髪の老人となったり、灰と化す。さらに、渡海の手段はコラク舟であったり、水晶の舟であったり、天馬であったりする。しばしば異界への到達と此岸への帰還が不思議な力によってなされる。

そこで、わが国の楽園のイメージはどのようなものなのだろうか。生命の根源とされる根の国はなるほど死の世界であろうが、それは時空を超えた場所、古代では「常

「世」としてはるか海上の不老不死の桃源郷とみなされてきたようだ。

万葉集には常世のイメージが数首に見られる。たとえば、大友宿禰三依による一首、「吾妹子は常世の国に住みけらし昔見しより変若ましにけり」（巻四・六五〇）常世ははるか彼方の地、永生の保証された国である。常世の「常」は「不断」の意で、「世」は時間の節目を指すとともに、古くは稲や粟などの穀物を意味していたという。とすると、常世はいつでも穀物のある場所ということになるのであろう。「田道間守 常世に渡り 八矛持ち参出来し時 時じくの 香の木の実を畏くも 遣したまへり」（巻一八・四一一）「時じくの香の木の実」とは、絶え間なく、季節をえらばずに一年中なっている香しい木の实だが、常世はこのような穀物や果物がいつも実っている豊饒な場所であろう。『日本書紀』には、常世の国は富みの満ちあふれた国、永遠の生命のある国と記され、また『古事記』では少彦名命は熊野からはるか常世の郷へ渡っていったともつたえられている。さらに『伊勢国風土記』逸文には「古言に、神風の伊勢の国、常世の浪寄する国と云へる」とある。

理想郷の常世の国は東方にあり、後に阿弥陀如来の西方浄土の観念の発展とともに、『日本霊異記』にも見られるように西方の常世の国が現われる。さらに九世紀末、十世紀はじめ頃になると、常世の観念と観音信仰が習合し、南の浄土、観世音菩薩の住む島、補陀落への憧憬がひろがっ

ていく。

理想郷である常世の国が神仙思想と結びついて成ったのが、瑞江浦嶋子が海中の蓬萊山とこよぐきに行ったという話である。『日本書紀』では、女と「相遂ひて海に入る。蓬萊山に到りて、仙衆を歴り覩る。」とあり、『丹後風土記』逸文の「浦嶋子伝」では、「其の容美麗しく、更比ふべきものなかりき。……女娘日ひけらく、『君、棹を廻らして蓬萊山に赴かさね』といひければ。……不意の間に海中の博く大きな嶋に至りき。」とある。

嶋子は漁をしていたときに神女と出会い、契りを結んで海神の宮殿に赴く。彼は三年の間、絶えず花が咲き、果実がたわわに実り、病気も労苦も死もない仙都に住み、やがて故郷が恋しくなり、耐えきれず、ついに神女と別れることになる。また戻れるようにと神女から玉匣を授けられて郷里に帰るが、そこはすっかり変わり、昔の面影はない。知人もいない。老人にたずねると、嶋子は昔海に出て還らず、あれからもう三百年になると、と答える。それを聞いた嶋子は絶望して玉匣を開くと、白雲が出て白髪の老人となつて死んでしまう。浦嶋子の伝説はさらに文飾され、高橋虫磨呂の長歌（巻九・一七四〇）によって定着をみたようである。

楽園あるいは常世、蓬萊山は現実の抑圧から解放された、幽暗な日常性を超えた言葉であろう。その響きはある種の呪性をおびた幻視の理想郷の風景を彷彿させる。

## ヨーロッパの大学出版事情

— 国際交流基金による訪欧派遣見聞記 —

山本 俊明 (聖学院大学出版会)  
 成田 和男 (北海道大学図書刊行会)  
 木下 正之 (東海大学出版会)

今年(一九九四年)三月一日〜十四日の二週間にわたり、山下正団長(大学出版部協会幹事長・東京大学出版会専務理事)以下、大学出版部協会加盟校等より十四名が参加した訪欧団の見聞の一端を、以下に紹介してみたい。

この訪欧団は、国際交流基金の「平成五年度地域・草の根交流欧州派遣事業」の一環として出張要請されたもので、派遣の目的は、「欧州主要国における大学出版事情調査と交流促進」ということであった。公式の訪問先は五か国六都市で、その詳細は別表のとおり。

さて、以上の日程で関係者と交流をおこなったが、今回の視察・意見交換で得た成果の詳細については正式な報告書をごらんいただくことにして、ここでは、私的な関心と観点からいくつかのテーマに分けてとりあげてみたい。

### ● 訪欧団日程表

3月2日	ドイツ	ベルリン	…国立図書館
3月4日	オーストリア	ウィーン	…ウィーン大学日本学研究所、 同図書館
3月7日	イタリア	ナポリ	…ナポリ東洋大学、同図書館、 グイダ書店
		ローマ	…ローマ日本文化会館
3月9日	ハンガリー	ブダペスト	…ブダペスト経済大学、同図書館 …第6回ブダペスト国際図書展
3月11日	フランス	パリ	…パリ大学出版社(PUF) パリ第3大学(ソルボンヌ・ ヌーヴェル)出版部 (PSN) パリ第8大学(ヴァンセンヌ) 出版部(PUV)

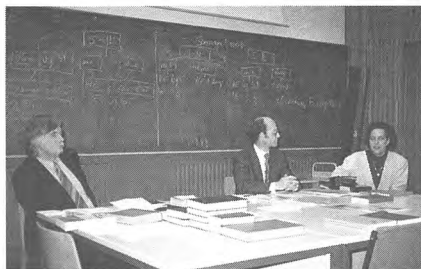
(なお、上記以外にも、参加メンバーが独自に市内の書店視察などをおこなった。)

### ■ ヨーロッパで大学出版の原点を見た

ヨーロッパは大学の生まれた場所であり、出版文化を長く培ってきた地域である。しかし、大学出版の様子は、これまでほとんど情報として手にできなかった。今回訪問したドイツでもオーストリアでも大学出版部が大学に設置されていることは確認できなかった。むしろ長い歴史を持つ



ソルボンヌ・ヌーヴェル大学出版部/  
ラクロワ出版部長 (右)



ベルリン国立図書館/  
左より、クレンピン氏、ハダミツキー氏



ヴァンセンヌ大学出版部/  
ロパール社長 (左)



ウィーン大学日本学研究所/  
リンハルト所長 (中央)

一般の出版社が学術書を出版してきている。一方、ハンガリーのブダペスト経済大学、イタリアのナポリ東洋大学、フランスのソルボンヌ・ヌーヴェル（パリ第三）大学などでは、それぞれ事情は異なるが、一般の出版社にはできない大学出版の重要性が発見され、あるいは見直され、大学出版に積極的に取り組む姿が見られた。

■少数で長期在庫：しかし価値ある本を作り、売る

ヴァンセンヌ（パリ第八）大学出版部の社長、マリー＝クレール・ロパール教授は、「教科書は作りません。それは、ヴァンセンヌ大学は大学改革のなかで、新しい人文学の方向を開拓してきているので、その領域の出版に主力を注いでいるからです」と語る。発行部数は専門学術書であるので、五〇〇部から多くても一〇〇〇部。最近では、人文学書の売れ行きが悪く、初版を五〇〇部にしほり、売れれば重版をする。それでも長期間在庫としてかかえ、最近では、在庫を処分しなければならぬ状況も生まれてきている。しかし「十年から十五年かかってよい本を売る。それが大学出版の使命ではないでしょうか」と言い切る。もちろんこのような学術書の出版が継続できるのは、出版部の活動に必要な資金の半分がフランス文部省から出ているほか、さまざまな出版助成があることによる。それにしても、一般の出版社ではできない出版活動。大学出版ここにあり。

■ヨーロッパの大学出版の歴史は、実はまだ短い



ヨーロッパには専門書店が多い。ショーウィンドーを見れば扱っている分野が一目でわかり、楽しい。写真は、理工学書(コンピュータ)、宗教書、自然科学書など、ウィーンの専門書店のディスプレイ。

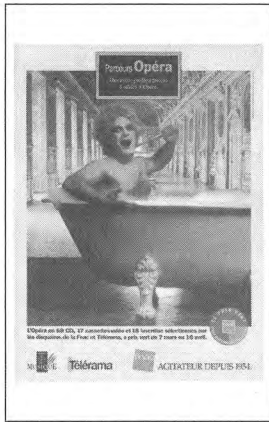


「フランスの大学出版部はだいたいどこも二十〜二十五年の歴史しかありません」と語るのは、ソルボンヌ・ヌーヴェル大学出版部の出版部長、ジャン＝ミシェル・ラクロー教授。「大学改革の中で、大学が一部の知識階級から、一般に開放され、知識層が広がりました。その市場に向けて大学出版が始まったのです」。大学の大量化とともに、学術書の読者が減り学術書出版が困難になってきた日本の状況とは異なるが、「確かに出版は不況です。しかし大学の研究の中で出版の意味が明確にされてきています。本に愛着を持っています。本を作ることに情熱を持っています」と語るラクロー教授に、文化の相違を越えて出版に関わる同志の姿を見る思いがした。

もちろん今回訪問した国々だけで「ヨーロッパの大学出版事情」というには、あまりに少ない見聞であるが、大学出版の基盤においた学術書出版の志が、それぞれの場所で脈々となみうっていることを確認できた。

#### ■ヨーロッパで出会ったユニークな書店

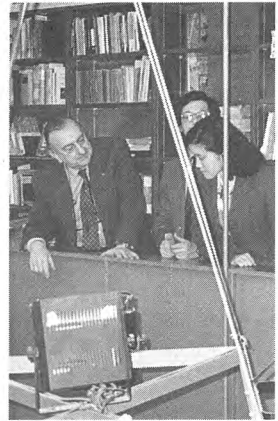
ウィーンのフリック書店。各フロアにパソコンがあり、本の検索に活躍している。思いきって来意を告げる。ペテランのルシア・バディアンさんが応対してくれる。三大取次があり買い切り制であること、割引販売はしないなど、オーストリアの書店事情を簡潔に話してくれた。以下、こうした出会いの中から印象に残った書店を紹介しよう。



フナックの出している「パルクール・オペラ」。オペラに関するCD、ビデオ、書籍の総合カタログ。24ページ、フルカラーで無料。ページ・レイアウトのセンスはさすが。



ハンガリーの週刊の書評誌「本の世界」。48ページ、48フォリント（約60円）。



マリオ・グイダ氏（左）。昼食前だったので、食前酒を振る舞われて聴くグイダ氏の熱弁は、耳に心地よかった。

## ■パリの大型書店・フナック

収獲。

支店もあるとのこと。割引本コーナーでは一〇〜五〇%引きで売っていた。国営の取次がなく、いまは出版社と直接取引だ。書店はすべて民営だが、その数については増減が激しく、わからないとのことであった。カウンター横に平積の書評誌「本の世界」を見つけた。これは大

## ■ブダペストで見つけた書評誌

ハンガリーにはまだ国営の書店が残っているのだから

か。こんな素朴な疑問を持って、アカデミア・ケニヴェ

シュボルト書店を訪れた。理工学書から児童書まである。

書店もあるとのこと。割引本コーナーでは一〇〜五〇%引きで売っていた。国営の取次がなく、いまは出版社と

直接取引だ。書店はすべて民営だが、その数については増減が激しく、わからないとのことであった。カウ

ンター横に平積の書評誌「本の世界」を見つけた。これは大

収獲。

ハンガリーの週刊の書評誌「本の世界」。48ページ、48フォリント（約60円）。

マリオ・グイダ氏（左）。昼食前だったので、食前酒を振る舞われて聴くグイダ氏の熱弁は、耳に心地よかった。

イタリアの田辺茂一氏率いるナポリ・グイダ書店

社長のマリオ・グイダ氏が、取次制度のないイタリアで

の出版社と書店の関係について二時間も説明してくれた。

「イタリアにおける書店経営の最大の問題は、出版点数が多すぎることです」。グイダ氏の答えは明快だ。若い社員

がわれわれをビデオに撮っている。レセプションの場所は、ふだん小ホールとして絵の展示会などを行なっている

という。「グイダは単なる書店ではなく文化サロンなので

す」。氏は胸を張った。「彼は真の文化人です」。ナポリ東洋大学のヴィータ教授が教えてくれる。イタリアの田辺茂一



ナポリ東洋大学/  
コッポラ副学長 (右から2人目)



ブダペスト経済大学/中央左より、ゲレグ学長、  
フサーク図書館長、ハラース出版部長



ローマ日本文化会館/  
岩倉具忠館長

フランスでは学生と教師は、五%引きで本を買うことができる。しかしフナック(FNAC)に行けば、誰でも五%引きで買える。地下一階・地上五階のフナック・エトワール・ビルの四〜五階が大型書店になっている。ポンビドー・センターに小ホールを持ち、著者のサイン会や対談会を行なっている。また情報誌も出している。まさに文化情報の発信源だ。ただし出版はしていないとのこと。案内してくれたローズ＝マリー・マキノ＝ファイヨールさんは、村上春樹の『ノルウェイの森』の仏訳者として知られる。この日フナックで、この本が驚くほど売れた。

以上、ヨーロッパの大学出版部と書店について、筆者らの印象に残ったエピソードを紹介した。

今回の訪欧で、ヨーロッパの学術出版の動向や大学出版部の活動、あるいは日本研究の現状に関する基礎的なデータはかなり集まったと思われる。

では、「草の根交流」のきっかけには、なったのだろうか。その意味で訪欧の後日談をひとつ。ナポリ東洋大学訪問の際にお会いしたグスタヴォ・クトロ教授(政治学部、日本近世思想史専攻)が、七月のナポリ・サミットのあとで東京に来られるとの連絡があった。長期滞在の可能性をおっしゃっていたから、この『大学出版』22号が出るころには、同教授との再会が実現しているであろう。こんなこともまた次のステップへの橋渡しとなるのかもしれない。

# 大学出版部ニュース

昨年は、創立三十周年ということでも、いろいろな行事が行われた。▼営業部会では、全国の大学生協百六十八店舗でブックフェアを開催した。五年前のブックフェアの規模よりも売上で五十%増の実績を確保した。▼編集部会では、『総合図書目録』と『三十年の歩み』を編集・刊行した。▼夏期研修会と第十二回日本・韓国大学出版部合同セミナーが開催され、七十五名が参加し、盛況のうちに実を上げることができた。▼九四年東京国際ブックフェアが幕張メッセで開催され、大学出版部協会として二十校四百点を出品展示した。▼専門書を出版する団体、人文会・歴史書懇話会など出版五団体合同新年会が開催され、協会もその一員として参加した。▼国際交流基金による「平成五年度欧州への地域・草の根交流派遣事業」に、欧州主要国における大学出版事情調査と交流を目的として、視察団十一大学十二名を派遣した。▼平成六年度の総会では、大学出版部協会の「準会員」として流通経済大学出版会・大阪大学出版会が加わった。▼大学出版部協会は、一九六三年（昭和三十八）に十校によって創設されたが、協会の活動が活発になるにつれて増加し、今回の二校の加盟によって二十二校になった。全国各地の加盟校・協力校を加えれば、北海道から沖縄にいたるまで、全国五十五大学を網羅する一大学術出版団体になったことになる。▼また、協会創立三十周年を期し、大学出版部運動をより積極的に、組織拡大を具体的に促進することを目指し、協会内に「組織委員会」を設置した。▼その一つの試みとして「大学出版部協会リーフレット・コンテスト」の原稿を協会加盟の出版部全役員・職員に応募を呼びかけている。大学出版部運動の理念・目的・活動を各大学内はもとより広く学外の人びとにも理解してもらえよう、ビジュアルな創造性に富んだ広報方法論を展開してくれるようとの、意図である。

## 北海道大学図書刊行会

▼松浦誠著『図説・社会性カリバチの生態と進化』（B5判・三六〇頁・定価二〇六〇〇円）  
真社会性カリバチの日本産全種（アシナガバチ亜科11種、スズメバチ亜科16種）の形態・生活史・営巣習性・社会行動などを、スマトラや台湾における近縁種の知見をも加え、カラー写真一〇二〇枚を用いて、種・属

## 聖学院大学出版会

▼酒井文夫著『国家と法の比較研究―違憲審査制と基本的人権の考察』（A5判四六四頁、定価八二〇〇円）  
▼『我々にとつて最も大切なのは、「思想の重み」を知ることであり、また人間の一人一人が自分の思想については、あくまで責任をもつことである。そして、自分の生きている



アシナガバチの蛹を襲うヒメスズメバチの女王

・亜科などの比較を軸に図示し解説する。ハブ、ヒグマをこえる危険動物スズメバチたちの聖域（＝巣）内での生活が写真により初めて明らかにされる。

時代に対し、また国家・社会に対し、常に「狂いのない眼」をもつことであろう。』（本文、「序章」より）  
▼第一部は、「欧米・日本の違憲審査制の比較」。第二部は、「国家と宗教・思想―基本的人権の考察」。  
▼長年にわたる著者（聖学院大学政経学部教授）の憲法・政治思想史研究の集大成。



## 慶應通信

▼『ソファで読む経営哲学』(清水龍登著)「情報化時代では短期的にはカネ、中期的には情報、長期的には信頼できる人間関係のネットワークが大切である」このような命題を、延一万社からのデータおよび大企業の社長二百余名のインタビューから抽出し、日本の経営者に必要な能力の特質と経営の本質に

迫っている。(一四〇〇円)

▼『改訂日米経済摩擦——全体像を求めて』(落合浩太郎著)日米経済摩擦とは何かと問われたら、まず推薦したいのが本書である。この特長は、①その歴史と変化を振り返り、全体像を提示、②理解の前提となる統計・数値の紹介、③政治・経済の両面からの分析、④年表・文献案内を付している。本書は昨年刊行されたが、今回大幅に改訂して新版となった。(二二〇〇円)

## 産能大学出版社

▼先行き不透明な現代の社会情勢の中、誰もが未来に不安を感じ、未来を知りたいことを渴望している。セオダー・モーティス著／高橋秀明訳『予測学入門』(四六判、二八〇〇円)は、数学的・科学的方法を用いて、未来の姿とそこに至る傾向を予測することは可能だとする、予測の科学である。原題は「PRE-

DICTIONS」(予言)。

▼バート・ナスス著／産能大学ビジョン研究会訳『ビジョン・リーダー——魅力ある未来像の創造と実現に向かって』(四六判、二五〇〇円)は、経営において魅力的で強力な力を発揮するビジョンを創り、それを実現していく考え方と方法を述べたユニークなリーダーシップ論である。あらゆる業種のさまざまな階層のリーダーたちの有効なツールになるだろう。

## 大学出版部ニュース

### 玉川大学出版社

▼三島次郎『生物誌からのエコロジ』(二二九六円) 本書は著者が旅先で出会った多くの動



物や植物について、読み物風に雑学知識を提示しながら専門的解説も加えて紹介している。自然に親しむ環境が失われつつある現代社会において、自然への関心と呼び起こす役割を果たす図版八〇点収録。

▼本年度四月一日付けで、玉川大学、玉川学園の理事長・学長・学園長の交代があった。新理事長には、小原芳明が就任。前理事長の小原哲郎は総長となった。

### 中央大学出版社

▼中央大学人文科学研究所編『陽気な黙示録 オーストリア文化研究』(定価五八七円)

絢爛たるウィーン世紀末文化を中心に十九世紀初頭から現代に至るまで、ハプスブルク帝国の辺境文化をも含めた広範なオーストリア文化に新たな光を照射し、その特質を探ろうとした本格論集の研究叢書である。

▼高橋治男編『Correspondance J.-R. BLOCH - M. MARTINE-T』(1911-1935) (定価五一五〇円)二人のフランス人作家が、文化創造への熱意と努力を評価し合い、芸術論と世界観を披瀝し合うもので、二十世紀前半のヨーロッパの激動が見え隠れし、資料的意義があふれ、またフランス知識人の心の軌跡を示している。四〇〇余通を年代順に配し、注釈と索引を付した、全篇フランス語で綴る往復書翰集。

## 東海大学出版会

▼7月刊行予定の『芸術経営学講座』は、佐々木見彦・九州共立大学経済学部教授の監修により、美術・音楽・演劇・映像の全4巻で構成される、日本では初めての本格的な芸術経営学のテキストです。

▼芸術経営学という新しい学問領域を確立し、現場の専門家を育成するために、本講座がその

一翼を担うものと思われま

す。▼執筆陣は、経験豊富な実務家、芸術経営学に関心を示す大学教授員など、現在第一線で活躍する人々です。

▼読者対象は芸術経営学を学ぼうとする大学・短大・専門学校

## 大学出版部 ニュース

### 東京電機大学出版局

▼高齢化社会に向けて社会人再教育や生涯学習に、大学としてどのように取り組むかが話題となっている。様々な模索の中で、公開講座の充実が目立っている。本学も昨年より「可視化情報」講座が始まった。空気や音、熱の流れなど目に見えないものを捉えるようにして現象を解明する新しい学問で好評である。講

座と連動したテキストを発行した。

『可視化情報学入門』（同編集委員会編、定価三一九三円）

▼もう一つが生涯学習への取り組みで本学職員によりマウンテンバイク入門をとり上げた。理工学書を中心とした小局にとっても異色の本となったが、出版を契機に著者は公的機関の講師も勤めることとなった。『MTBハイク入門』（仲野成憲、定価一五四五円）

## 東京大学出版会

▼東京大学では、教養学部を中心に新カリキュラムに即した教科書作りが各分野で進められている。その先陣を承ったかたちの「基礎統計学」三部作がいよいよ完結する。情報化の進展に伴い複雑多様化する各種データ数字を正しく扱うことが現代人にとって必須の要件となっているが、新しい時代の新しい統計

### 東京農業大学出版会

▼『野菜栽培あれこれ』（定価一五〇〇円） 米安 晨著

生きているということが本当に分るといふことは、豊かな経験と深い愛情ではないでしょうか。これは別に人間のことを言っているわけではありません。植物は、確かに動けない。しかし動いていないわけではないのです。刻々と変化し、季節を

学を目指した企画・立案からまる六年。その年月の多くは原稿執筆のためよりも加筆・訂正・削除等の編集作業に費やされた。身近かなデータや具体例をはじめ、図や絵を駆使することにより、いずれもこれまででない親しみやすいテキストとなった。

I 統計学入門 二八八四円  
II 人文・社会科学の統計学 二九八七円  
III 自然科学の統計学 二九八七円

敏感に感じとっているのです。寒い時には「寒い」と、暑い時には「暑い」と表現します。野菜をつくるには、野菜の特性を知ることです。トマトとナスでは、同じナス科でもやはり特性が違います。

著者は、約五十年間野菜作りと研究に専念してきました。だから学生は著者を「麦わら帽子」と言います。その豊富な経験と植物への深い愛情をまとめました。

## 東京理科大学出版会

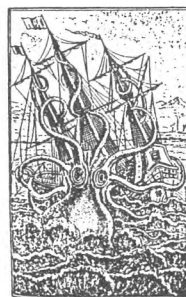
一九八四年七月創刊の月刊誌『SUT BULLETIN』は、



本年六月号で通巻一二〇号を迎え、「明日をひらく科学教養誌」をモットーに理科大の中堅研究者を中心に編集され充実。最近の特集を紹介すると、三月号「建築設計とコンピュータ」その前線、四月号「数学、ここが好き」が嫌い、五月号「エネルギーの現状と施設」、六月号「雷の制御と安全対策」と興味深いテーマが並んでいる。便利な年間予約制度（年一二回五八〇〇円）をお奨めします。

## 法政大学出版局

刀禰勇太郎著『蛸』二九八七円  
▼世界一のタコ好き国に出たタコロジー研究：法政大学出版局の名シリーズ「もの」と人間の文化史」も七十巻を超えた。最新刊『蛸（たこ）』は、とりわけ民俗学的考察に富んでいる。：『週刊朝日』重金教之氏評  
▼蛸のような人間と、人間のような蛸とのだましあいの文化史



：民俗学、民族学、生物学などあらゆる方向から十二分に調理され、集大成された『蛸』が、日本人に通底するタコ独特の世界へと導いてくれる。：『週刊文春』熊谷真菜氏評

## 大学出版部ニュース

### 放送大学教育振興会

▼平成七年三月に刊行を予定している図書は七十七点。トータルで三百名に及ぶ執筆陣は、暑さも物かわ、取材に脱稿に、また校正にと大忙し。▼執筆者十四名を擁しての『世界の宗教』や『動物の進化』、十三名による『現代の精神保健』など話題作がズラリ。一方、『家族過程論』（正岡寛司）、『住まいの環

境学』（梅干野晃）、『地域福祉論』（大橋謙策）、『教育の心理』（吉田章宏）、『法学入門』（星野英一）、『民俗文化史』（宮田登）、『現代の国際政治』（高橋和夫）、『現代日本の地方自治』（大森彌）、『労使の關係』（桑原靖夫）、『宇宙観の歴史と人間』（金子務）など一人で奮闘中の執筆者も多い。▼当教育振興会も、この秋、設立十周年を迎える。その記念誌作成に出版部も大わらわ！

### 明星大学出版部

▼岡本邦彦著『現代科学技術論』（定価三〇九〇円）  
最近の先端技術の発展は、ロボット、ニューメディア、新素材、宇宙・原子力および防災・環境問題など、社会全般に大きな影響を与え、大学においてさえも工学系、理学系はいうに及ばず経済、社会、教育などの人文系の学生を含めて先端技術の

動向を知ることが必要不可欠となっている。  
本書は、大学で学ぶ者に現代における技術革新について正しい知識を持たせることを目的としたものであり、内容は「序論 技術史概説、先端技術各論、総括」より構成されており、技術論というよりは、巨視的な技術学の書である。

▼井上英明・佐々木清編『小学校中学校国語科教育法概論』（定価二七八一円）

## 早稲田大学出版部

▼『縛られた村』(朱暁平／杉本達夫訳、定価二六〇〇円)の刊行で、「新しい中国文学」(全6巻)が完結した。各紙誌で高評を得た既刊『棺を蓋いて』『琥珀色のかがり火』『都市の困惑』『黒駿馬』(定価各二四〇〇円)、『初恋』(定価二六〇〇円)と合せてセットでの購入をお薦めします。▼『新井白石 東雅』(杉本つとむ

## 大学出版部 ニュース

### 京都大学学術出版会

▼日本生命財団助成金による初めての刊行物『三宅山御鹿狩絵巻』を世に問う。これほど条件のいい助成はあるまいし、大学出版部名指しの助成ということもあって、それに恥じぬ本を出版しなければならぬ、と決意した。それから五年、この文化財保存の地(大分県竹田市)では二冊の調査報告集を、本番に

編著、定価四七〇〇円)を刊行した。日本の古典における「名物」の語源を探索した最良の辞典。白石の自筆本を写真版で収録し、忠実な翻刻を付す。索引は見出し語・人名・事項・書名・語彙の五種類を完備。



そなえて編んだ。近世の狩について参考になる資料も乏しく、岡山大学池田文庫や仙台は伊達家の膨大な資料にも目を通した。そしてやっと、ここに刊行を迎えることができた。こうした史料を編むには、確かに編集部の負担も大きい。編集部が整理し作成した原稿だけでも、四百字千枚は超える。しかし、こうした仕事は編集者冥利に尽きる。日本生命財団の大学出版部への助成の永年の継続を望む。

## 名古屋大学出版会

▼森田勝昭著『鯨と捕鯨の文化史』(定価三九一四円)鯨は人間にとって重要な生活財であると同時に、その心を魅了し、意味の産出を促す文化的存在でもあった。本書は、捕鯨活動四百年の歴史を描き切ることにより、東西の捕鯨文化を浮彫りにするとともに、自然環境と人間の関係をも鋭く洞察する。

### 大阪経済法科大学出版部

▼岩崎允胤著『要説・西洋古代哲学史』  
「人間への愛の存するところ、技術への愛もまた存する」(『ヒッポクラテス医学集典』)「すべての人間は、生まれつき、知ることを欲する」(アリストテレス『形而上学』)「大切にしなければならぬのは、たんに生きることではなく、よく生きるこ

▼渡邊二郎訳『ハイデッガー・ハイパーパス往復書簡一九二〇—一九六三』(定価四六三五円)二〇世紀を代表する二人の哲学者の交流と葛藤の軌跡を刻み、戦前・戦後の時代の転変を映し出した第一級のドキュメント。

▼橋川文三著／筒井清忠編・解説『昭和ナショナリズムの諸相』(定価五一五〇円)歴史の變に迫る昭和ナショナリズムの内在的理解への道を拓いた単行本著作集に未収録の論考等を集成

とである」(プラトン『クリトン』)一著者はこの三つの言葉、哲学を研究するさいの三つの重要な言葉としてかかげる。Iギリシャ・ポリス社会における哲学の形成と発展 IIヘレニズム・ローマ期の社会における哲学の形成と発展 補論I国家と法Iプラトンとアリストテレス 補論II中世哲学 四つの章からなる哲学への誘いは、混迷の現代にこそふさわしい。古代哲学入門者待望の書。

## 関西大学出版部

▼大西昭男著『それもまたよし—学長十五年—』(定価一八〇〇円)本書は、著者が関西大学学長として、文人として、また人間として、学長十五年の間に執筆されたもののうち、特に大学教育、文化論、親子の人間関係、そして趣味の世界におよぶものなどから珠玉の五十余篇を選んだエッセイ集である。それ

大学出版部ニュース

## 流通経済大学出版会

このたび協会に加入いたしました。今後ともよろしく。

▼青井和夫著『長寿社会論』(定価三七〇〇円)

本書は、人口高齢化という人口現象がもたなくなって生じる社会変動を経験する社会いわゆる高齢化社会を論じたものである。高齢者の問題を、(1)高齢社会の全体的な構造問題、(2)高齢層を

その作品から、筆者の観知、人間愛、信義など、豊かな人間性に触れることができ、味わい深い。

▼野村幸正著『かかわりのコスモロジー—認知と臨床のあいだ—』(定価二〇〇〇円)認知はかかわりにあり、具体的な状況に埋め込まれて成立する。分析から統合へ、科学の知から臨床の知へ。「私」の科学、21世紀の心理学をめざして、いま注目の状況論を展開する。

## 九州大学出版会

▼中村廣治編著『市場経済の思想像』三二九六円。細江守紀・濱砂敬郎編『現代経済学の革新と展望』三九一四円。前者は人の「生きざま」の根底に関わる市場経済についての思想の歴史を、現在の市場経済の態様との関連において追跡。後者は「市場経済の普遍化」グローバル化の進展の中で政府と市場の役割

## 大阪大学出版会

このたび協会に加入いたしました。創立は昨年四月、刊行開始は同十二月、いよいよ本格的に始動。今後ともよろしく。

▼山田信夫著『ウイグル文契約文書集成』B5・一〇九二頁、全三冊、函入り、定価三万円。

▼陶徳民著『懷徳堂朱子学の研究』A5・四二〇頁・定価六六

分担をインセンティブ分析をふまえて再構築することが現代経済学に要請されている(編者序)として、経済学研究の分析フレームを総合的に再検討し、新しい理論的視角を模索する論文集。▼清水孝純『道化の風景—ドストエフスキーを読む—』三二九六円。ドストエフスキーの複雑極まりない世界を、道化性というキー・コンセプトで鮮やかに分析し、その文学の秘密を全く新たな角度から照射した。

九五円。

▼(発売元)懷徳堂記念会編『懷徳堂—浪華の学問所』A4・九二頁・定価二〇六〇円。〈最新刊〉

▼M・J・スメサースト/木曾明子訳『アイスキュロスと世阿弥のドラマトウルギー—ギリシア悲劇と能の比較研究』A5・四五〇頁・定価七二五円。

両古典劇は、なぜ世界的権威を得たのか、なぜ芸術的極致をゆくのか、詳しく解析する。

# 新刊案内 '94・4 '94・6

(表示価格は税込みです)

## 北海道大学図書刊行会

- アメリカ憲法史 M・ベネディクト／常本照樹訳 二八八四円  
 骨格標本作製法 八谷 昇・大泰司紀之著 八二四〇円  
 CD 北大寮歌 水野 一・川越 守校訂 二八八四円

## 聖学院大学出版会

- 国家と法の比較研究―違憲審査制と基本的人権の考察 酒井 文夫 八二〇〇円

## 慶應通信

- ソファで読む経営哲学 清水 龍瑩 一四〇〇円  
 近代思想論―ヨーロッパと日本― 多田 真鋤 三二〇〇円  
 世界経済論―情報と経済システム― 竹森 俊平 二〇〇〇円  
 法令研究統覧 利光三津夫 四〇〇〇円  
 大正デモクラシーと陸軍 浅野 和生 二八〇〇円  
 改訂 日本経済摩擦―全体像を求めて― 落合浩太郎 二二〇〇円  
 新版 福翁自伝 福澤 諭吉 一八〇〇円  
 虎が雨 高橋誠一郎 一六〇〇円

## 障害児と教育その心―肢体不自由教育を考える―

- 村田 茂 二二〇〇円  
 加藤安雄編 八五〇〇円

## 産能大学出版部

- 最新・アジアビジネス最前線 B・ナスス／産能大学ビジョン研究会訳 二五〇〇円  
 快体心書 増田 辰弘 一八〇〇円  
 予測学入門 久保 明 一五〇〇円  
 新教程ワープロ入門 T・モーティス／高橋秀明訳 二八〇〇円  
 産能短大情報教育開発研究グループ編著 一五〇〇円  
 変革期の「人事」基礎知識 小嶋経営労務事務所編著 一八〇〇円  
 心の法則を活用すればセールスに絶対成功する 坂上 肇 一五〇〇円  
 ブレイクスルー・リエンジニアリング 日比野省三・櫻井敬三・関昭二 一五〇〇円  
 物流リエンジニアリングの実践法 和多田 作一郎 二〇〇〇円  
 増補改訂版・OJTと職場経営 大貫 章 二〇〇〇円  
 新製品開発マニュアル P・ヒンメルファープ／中村元一 三六〇〇円  
 一所懸命売ろうとするから売れない 平松 陽一 一五〇〇円  
 表示のガイドブック 阪急百貨店品質管理室編著 一六〇〇円
- 玉川大学出版部  
 教育的価値論の研究 増淵 幸男 四九四四円  
 全人教育論 小原 國芳 一六四八円  
 生物誌からのエコロジー 三島 次郎 三二九六円  
 武士 行動の美学 小澤 富夫 二四七二円  
 日本語表現法 長野 正 二八八四円

生物学を読む  
子どもの表現活動  
松香光夫・吉田邦久編 二四七二円  
岡田 陽 一八五四円

■中央大学出版部  
法律家を目指す諸君へ——一九九四年度版——  
中央大学法職講座運営委員会編 二〇六〇円

陽気な黙示録 オーストリア文化研究  
中央大学人文科学研究所編 五八七一円

Correspondance J.-R. BLOCH - M. MARTINEZ (1911-1935)  
高橋治男編 五一五〇円

■東海大学出版会  
海水の科学と工業  
日本海水学会・ソルト・サイエンス研究財団共編 二五七五〇円

情報科学入門  
西村文孝編著 一八五四円

セネカ入門—セネカと私—  
茂手木元蔵 一八五四円

図説イギリスの歴史 マクダウエル／大澤謙一訳 三〇九〇円  
トルコ音楽にみる伝統と近代 ベーハール／新井政美訳 三二九六円  
観光学原論 水野 潤一 二一六三円

裁かれたソクラテス  
ブリックハウス&スミス／米沢茂・三嶋輝夫訳 五一五〇円

■東京大学出版会  
知の技法—東京大学教養学部「基礎演習」テキスト  
小林康夫・船曳建夫編 一五四五円

いま、なぜ民族か  
蓮實重彦・山内昌之編 一八五四円

政治—個人と統合〔第2版〕  
有賀弘・阿部斉・斎藤眞編 一八五四円

北村透谷  
色川 大吉 二四七二円

学校選択と学校参加—アメリカ教育改革の実験に学ぶ  
日本の労働社会  
黒崎 勲 三九一四円  
栗田 健 四二二〇円

Pascal 入門—TURBO Pascal 演習〔第2版〕  
永野三郎・長島 忍 一六四八円  
江里口良治 二八八四円

宇宙の科学  
機械工学実験—東京大学機械工学④  
物理数学入門・基礎数学11 三九一四円

正倉院文書目録3—統修後集 東京大学史料編纂所編 一三三九〇円  
枢密院会議事録67・昭和篇25 国立公文書館所蔵 一四四二〇円

帝国議会貴族院委員会速記録・昭和篇49  
帝国議会衆議院委員会速記録・昭和篇61・62 国立国会図書館所蔵 二二三六〇円

地球・東京大学公開講座58 吉川弘之著者代表 二四七二円  
日本女性史研究文献目録Ⅲ—一九八七—一九九一年 女性史総合研究会編 五六六五円

中国における国家建設の試み—湖南一九一九—一九二一年  
塚本 元 五九七四円

社会的共通資本—コモンズと都市  
宇沢弘文・茂木愛一郎編 三九一四円

現代フランスの史的形成—両大戦間期の経済と社会  
廣田 功 七〇〇四円

知とモダニティの社会学 庄司興吉・矢澤修次郎編 四九四四円

日本の教育 堀尾 輝久 二七八一円

手のなかの脳 鈴木 良次 二二六六円

枢密院会議事録68・昭和篇26 国立公文書館所蔵 一四四二〇円

帝国議会貴族院委員会速記録・昭和篇50

帝国議会衆議院委員会議録・昭和篇63・64  
国立国会図書館所蔵一三三六〇円

蹴鞠の研究—公家鞠の成立  
国立国会図書館所蔵 各一六四八〇円

国際金融論  
渡辺 融・桑山浩然一四四二〇円  
アジアから考える5—近代化像  
河合 正弘 四三二六円

教師と子どもの関係づくり—学校の臨床心理学  
溝口・浜下・平石・宮嶋編 三〇九〇円

中国仏教史5—隋唐の仏教(上)  
近藤 邦夫 二五七五円

戦後政治と政治学  
鎌田 茂雄一三三九〇円  
日系アメリカ人のエスニシティ—強制収容と補償運動による変遷  
大嶽 秀夫 二四七二円

アポトーシス・UPバイオロジー94  
竹沢 泰子 三九一四円

偏微分方程式の差分分解法  
田沼 靖一 一六四八円

放送制度論のパラダイム 高見頼郎・河村哲也 三二九六円  
枢密院会議事録69・昭和篇27 国立公文書館所蔵一八五八円

帝国議会貴族院委員会速記録・昭和篇51  
国立国会図書館所蔵一四四二〇円

帝国議会衆議院委員会議録・昭和篇65・66  
国立国会図書館所蔵 各一六四八〇円

■東京電機大学出版局  
電気基礎(上) <文部省検定済教科書> 一〇六〇円

電気基礎(下) <文部省検定済教科書> 九四五円

電子基礎 <文部省検定済教科書> 一二〇五円  
情報技術基礎 <文部省検定済教科書> 一一六五円  
小児保健 <文部省著作教科書> 一〇七〇円

川島純一他 三四〇〇円

電子基礎指導書 秋富勝他監修 四一二〇円  
情報技術基礎指導書 秋富勝他監修 二七八一円

スポーツと健康 内匠屋 潔他 二七八一円  
MTB(マウンテンバイク)ハイク入門 仲野 成憲 一五四五円

デジタル第1種工事担任者試験の徹底研究  
東京電機大学出版局編 二五七五円

電気基礎上 詳解付 川島・斉藤 二四七二円  
電気基礎下 詳解付 津村・宮崎・菊地 二三六九円

Pascal ビギナーズテキスト 大井・小山 二八八四円  
材料力学考え方解き方 萩原 國雄 二八八四円

機械力学考え方解き方 小山 十郎 二六七八円  
無線従事者試験の徹底研究 予備試験編 松原 孝之 三一九三円

同編集委員会編 三一九三円  
可視化情報学入門 吉川 忠久 一七〇〇円

電波法規第三版(1・2陸技の徹底研究) 一七〇〇円

■東京農業大学出版会  
野菜栽培あれこれ—私の野菜作り半世紀—  
米安 晟 一五〇〇円

植物保護学 田村 正人 一二〇〇円

■法政大学出版局  
日本社会運動史料/機関紙誌篇『労働農民新聞(2)』  
法政大学大原社会問題研究所編 一〇九九〇一円

忘我の告白 M・ブーバー編/田口義弘訳 三六〇五円  
時の美学—『魔の山』の構成時間とその受容—

チャーティストたちの肖像 武井勇四郎 三六〇五円



- G・D・H・コール／古賀秀男・岡本充弘・増島宏訳  
 新編伊那風土記―隻眼の神と御霊信仰― 松山 義雄 五九七四円  
 衝突する宇宙 I・ヴェリコフスキー／鈴木敬信訳 二五七五円  
 祖父チャールと私―若き冒険の日々― 三五〇二円  
 W・S・チャール／佐藤佐智子訳 三九一四円  
 エロスと精気(エネルギー)―性愛術指南―  
 J・N・パウエル／浅野敏夫訳 一九五七円  
 有閑階級の女性たち―フランスブルジョア女性の心象世界―  
 B・G・スミス／井上堯裕・飯泉千種訳 三六〇五円  
 時代おくれの人間(下)―第三次産業革命時代における  
 生の破壊― G・アンダース／青木隆嘉訳 四九四四円  
 再生産と自己変革―新しい社会理論のために―  
 庄司興吉編 四三二六円  
 山本弘文編 九六八二円  
 近代交通成立史の研究  
 精神分析と横断性(G・ドゥルーズ序文)  
 F・ガタリ／杉村昌昭・毬藻充訳 四六三五円  
 競争社会をこえて A・コーン／山本啓・真水康樹訳 四九四四円  
 ダイアローグの思想―ミハイル・バフチンの可能性―  
 M・ホルクウィスト／伊藤誓訳 三八一一円  
 秘境アラビア探検史(上)  
 R・H・キールナン／岩永博訳 二八八四円  
 N・エリアス／徳安彰訳 二五七五円  
 社会学とは何か  
 ファランの痙攣派―18世紀フランスの民衆的実存―  
 中村 浩巳 四九四四円  
 E・T・A・ホフマン―ある懷疑派夢想家の生涯―  
 R・ザフランスキー／識名章喜訳 五九七四円  
 祝福から暴力へ―儀礼における歴史とイデオロギー―  
 M・ブロック／田辺繁治・秋津元輝訳 四四二九円  
 J・アタリ／山内昶訳 五九七四円  
 所有の歴史
- 放送大学教育振興会  
 行政法 成田 頼明 一七五〇円
- 明星大学出版部  
 現代科学技術論 岡本 邦彦 三〇九〇円  
 小学校中学校国語科教育法概論 井上英明・佐々木清編 二七八一円  
 コンピュータ概論 大塚 寛治 二四七二円
- 早稲田大学出版部  
 ラグビーの作戦と戦術 日比野弘・松元秀雄・出本巧 二八〇〇円  
 ロシア精神史―哲学と社会思想の流れ―  
 C・レヴィーツキイ／高野雅之訳 三七〇〇円  
 イギリス議会政治の形成 松園 伸 三五〇〇円  
 鉄道時刻表事始め―ブラドショオ創刊一五〇周年―  
 小松 芳喬 四八〇〇円  
 片岡寛光編 五〇〇〇円
- 現代行政国家と政策過程  
 新井白石 東雅一・影印・翻刻・解題・索引  
 杉本つとむ編著 四七〇〇円
- 新しい中国文学 全6巻完結  
 第6巻 縛られた村 朱曉平／杉本達夫訳 二六〇〇円  
 早稲田大学蔵資料影印叢書 国書篇第三期 全16巻  
 第43巻 南総里見八犬伝稿本(二) 柴田光彦編 一八〇〇円
- 名古屋大学出版会  
 市場経済―歴史・思想・現状― 山口重克編 二五七五円  
 エスニシティの政治社会学―民族紛争の制度化のために―  
 関根 政美 二八八四円  
 ケインズ経済学の再生―21世紀の経済学を求めて―  
 P・デビッドソン／永井進訳 二五七五円

昭和ナショナリズムの諸相

橋川文三／筒井清忠編・解説 五一五〇円

ハイデッガー・ヤスパース往復書簡 一九二〇—一九六三

W・ビーメル&H・ザーナー編／渡邊二郎訳 四六三五円

動物集団の遺伝学 野澤 謙 六六九五円

鯨と捕鯨の文化史 森田 勝昭 三九一四円

情報処理教育センターハンドブック 岡田 稔編 五一五〇円

ドイツ家政学・生活経営学 今井 光映 五一五〇円

悪性リンパ腫細胞診アトラス 栗田宗次・須知泰山他 八二四〇円

■京都大学学術出版会

アルケー〔第二号〕—関西哲学会年報(一九九四)

関西哲学会編 一五〇〇円

三宅山御鹿狩絵巻

朝尾直弘・佐々木丞平・豊田寛三編 一八〇〇〇円

Animal Societies—Individuals, Interactions and Organisation

Edited by P. Jarman and A. Rossier 三八〇〇円

■大阪経済法科大学出版部

フランスとスペインの人民戦線—五十周年記念・全体像比較研究—

M・S・アレグザンダー／H・グラハム編

山口正之監訳／向井喜典・岩村等ほか訳 四三二六円

■関西大学出版部

それもまたよし—学長十五年— 大西 昭男 一八〇〇円

漢簡研究の現状と展望 大庭 脩編 七〇〇〇円

かかわりのコスモロジー—認知と臨床のあいだ— 野村 幸正 二〇〇〇円

■九州大学出版会

市場経済の思想像 中村廣治編著 三二九六円

現代経済学の革新と展望 細江守紀・濱砂敬郎編 三九一四円

経済学説史のモデル分析〈経済工学シリーズ〉〔第2版〕

駄田井 正 二八八四円

道化の風景—ドストエフスキーを読む— 清水 孝純 三二九六円

転換期の文化と社会〈九州産業大学公開講座5〉 九州産業大学公開講座委員会編 二〇〇〇円

■流通経済大学出版会

■大阪大学出版会

アイスキュロスと世阿弥のドラマトゥルギー—ギリシア悲劇と能の比較研究— M・J・スメサースト／木曾明子訳 七七二五円

▼作文は大嫌いだったくせに、文字を並べたり、印刷したりすることにゃたら興味があった。子どもの頃はゴム印をベタベタ擦して喜んでいたし、学生時代のゼミのレポートなどは、ゴミ捨て場から拾ってきたガリ版印刷機を使ってもっぱら作成していた。いま、広告の原稿用紙の小さな枠目を埋めるのがそれほど苦にならないのは、ガリ版の経験が生きているためかも知れない。

▼この仕事に就いたころは、端物の印刷を依頼していた目白の小さな町工場に、原稿を届けたりするついでであつて、よく立ち寄つたものだ。用が済んでも、いつまでも作業をながめているので印刷所のオヤジ曰く、「イギリスでは印刷は貴族の道楽だそうですね、やってみませんか……」。もちろん、私は貴族ではないから、そんな金もないし、第一、活版印刷をウサギ小屋に持ち込んだらどういふことになるかは目に見えている。たちまち家庭内公害で奥方から告発されるはめになるだろう。

▼そんなわけで、自分専用の印刷機を持つ夢はほぼあきらめかけていたころ、ワープロが登場する。そして近年のDTPブーム。興味を持つなどいわれても私には無理な話だ。ここ一年ぐらゐの間にレーザー・プリンタの価格が一気に下がったこともあつて、最低限のシステムを購入して印刷こつこを楽しんでいる。この頁もそのシステムを

●製作の現場から 8

人もすなる  
DTPなるものを  
我も……

使つて作成した。プリンタは300DPI (REt 機能によりメーカー発表600DPI相当)だが、多少大きめに印字したものを製版で縮小しているから、密度だけなら本誌の本文(233DPI)と同等である。ただし印字品質にはプリンタの機械的な精度やフォントも関係してくるから、実際にはかなり読みにくいのではないかと思う。ロー・エンド

のレーザー・プリンタを使用した普通紙出力の見本として、我慢してお読みいただきたい。

▼さて、DTPという言葉は、「普通」「卓上出版」と訳されているが、これにはかなり無理がある。もともとビジネス文書の社内製作に用いられていた言葉が商業出版にそのまま取り入れられたための混乱だ。普通紙であ

れ印刷紙であれ、版下出力までやつたとしてもせいぜい「卓上組版」、版下出力を出力センターや印刷所に依頼した場合に「電子編集」というのが正確なところだろう。

▼なお、道楽でやっている分には何の支障もないのだが、実際にDTPを出版業務、とりわけ学術書・専門書の出版に採り入れようとすると様々な問題があることに気づかされる。DTPでは、組版業務の中で最も技術を要する「コーディング」に相当する作業と、最も時間のかかる「差し替え」を著者・訳者、あるいは編集者がやつてしまつわけだが、その人件費は無料ではない。さらに、普通紙ならと

もかく、決して安くはない印刷紙出力代とコンピュータの減価償却費、ランニング・コストを加えたら、DTPなら安くなるとは必ずしもいえないのだ。

▼赤鉛筆がキーボードとマウスにかわるだけで、人件費は同じだという人もあるだろうが、実際にやってみると、普段赤鉛筆で気楽に指定していることをコンピュータに理解させるのは、かなりやつかない作業であることがわかる。いちばん扱いやすいといわれるMacintoshのDTPソフトにしても、完全なペーパーレスでの作業は無理だ。目も疲れるし、結局は赤鉛筆とキーボードの併用となる。

▼その他にも、削除や追加・訂正の記録が残らないなど、問題は多い。大学出版部協会の編集部会では、業務としてDTPを導入している出版部の編集者をレポーターとして、「DTPの功罪」、さらには「DTPと編集者を考える集い」を計画している。その際には、是非多数ご参加いただき、活発なご意見をいただきたい。(アップルバイ)

# 大学出版部協会加盟出版部一覽

北海道大学図書刊行会	〒060 札幌市北区北9条西8丁目 北大構内 TEL.011-747-2308 FAX 011-736-8605
聖学院大学出版会	〒362 埼玉県上尾市戸崎1-1 TEL.048-725-0324 FAX 048-725-0324
慶應通信	〒108 東京都港区三田2-19-30 TEL.03-3451-3584 FAX 03-3451-3122
産能大学出版部	〒152 東京都目黒区自由が丘2-16-5 自由が丘サンビル TEL.03-3724-9101 FAX 03-3717-4346
玉川大学出版部	〒194 東京都町田市玉川学園6-1-1 TEL.0427-39-8935 FAX 0427-39-8940
中央大学出版部	〒192-03 東京都八王子市東中野742-1 TEL.0426-74-2351 FAX 0426-74-2354
東海大学出版会	〒151 東京都渋谷区富ヶ谷2-28-4 TEL.03-5478-0891 FAX 03-5478-0870
東京大学出版会	〒113 東京都文京区本郷7-3-1 東京大学構内 TEL.03-3811-8814 FAX 03-3812-6958
東京電機大学出版局	〒101 東京都千代田区神田錦町2-2 TEL.03-5280-3433 FAX 03-5280-3563
東京農業大学出版会	〒156 東京都世田谷区桜丘1-1-1 TEL.03-5477-2562 FAX 03-5477-2643
東京理科大学出版会	〒162 東京都新宿区若宮町19 TEL.03-3235-5692 FAX 03-3235-9632
法政大学出版局	〒162 東京都新宿区市谷田町2-14-1 TEL.03-5228-6271 FAX 03-5228-6010
放送大学教育振興会	〒105 東京都港区虎ノ門1-14-1 郵政互助会琴平ビル3F TEL.03-3502-2750 FAX 03-3592-2482
明星大学出版部	〒191 東京都日野市程久保2-1-1 TEL.0425-91-9979 FAX 0425-93-0192
早稲田大学出版部	〒169 東京都新宿区戸塚町1-103 TEL.03-3203-1551 FAX 03-3207-0406
名古屋大学出版会	〒464-01 名古屋市千種区不老町1 名古屋大学構内 TEL.052-781-5027 FAX 052-781-0697
京都大学学術出版会	〒606-01 京都府京都市左京区吉田本町 京都大学構内 TEL.075-761-6182 FAX 075-761-6182
大阪経済法科大学出版部	〒581 大阪府八尾市楽音寺6-10 TEL.0729-41-8211 FAX 0729-41-9979
関西大学出版部	〒564 大阪府吹田市山手町3-3-35 TEL.06-388-1121 FAX 06-389-5162
九州大学出版会	〒812 福岡市東区箱崎7-1-146 九州大学構内 TEL.092-641-0515 FAX 092-641-0172
流通経済大学出版会(準会員)	〒301 茨城県龍ヶ崎市平畑120 TEL.0297-64-0001 FAX 0297-64-0011
大阪大学出版会(準会員)	〒565 大阪府吹田市山田丘1-1 大阪大学事務局内 TEL.06-877-1614 FAX 06-877-1614

大学出版(第22号) '94夏 平成6年7月1日発行 発行所 大学出版部協会

〒113 東京都文京区本郷7丁目3番1号 東大構内 東京大学出版会内 電話 03-3812-2111 (内)7954

頒布価格100円 千共